〈その他〉

障害者（児）のライフサイクルに応じた課題の理解を目指した学生フィールドワーク成果

－ダウン症候群をはじめとする知的障害・自閉症スペクトラム障害等がある人（児）との交流を通じて－

Accomplishment of students' fieldwork to understand the challenges experienced by people (children) with disability in different phases of life— Through interactions with people (children) with intellectual disability/autism spectrum disorder including those with Down syndrome —

西井崇之[1]　栗原麗羅[1]　畑下博世[1]　入駒一美[1]　近藤純子[1]
桑原義登[2]　江田裕介[3]　小田真弓[2]

1　東京医療保健大学和歌山看護学部看護学科
2　和歌山信愛大学教育学部
3　和歌山大学教育学部

Takayuki NISHII[1], Reira KURIHARA[1], Hiroyo HATASHITA[1],
Kazumi IRIKOMA[1], Junko KONDO[1], Yoshito KUWAHARA[2], Yusuke EDA[3], Mayumi ODA[2]

1　Wakayama Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University
2　Faculty of Education, Wakayama Shin-ai University
3　Faculty of Education, Wakayama University

要　　旨：【目的】障害者（児）のライフサイクルに沿った課題と支援の理解を目指した学生フィールドワークの成果を明らかにする。

【方法】B 大学看護学部、C 大学教育学部、D 大学教育学部に在籍している学生７名を対象に、フィールドワーク参加前後に障害の理解等に関する無記名自記式質問紙調査を行った。

【結果】参加前後の調査結果を比較すると、９項目中８項目で障害者（児）支援に関する理解度が高くなっていた。障害者（児）との良好な関係の築き方、障害者（児）の健康課題のニーズの抽出、障害者（児）の自己決定およびエンパワメントを促進する支援等の４項目の理解度は大きく上昇していた。

【結論】フィールドワークに参加した学生は、障害者（児）及び家族の理解や様々な専門職者によるライフサイクルに沿った支援の意義を理解できたこと、他大学の学生との交流を通じて、関連分野の学修の必要性や多職種連携の重要性を認識できたことが明らかになった。

Abstract：[Objectives] To determine the accomplishment of students' fieldwork to understand the challenges experienced by people (children) with disability in different phases of life and the support to meet these challenges.

[Methods] We conducted anonymous, self-administered questionnaires about the understanding of disability among seven students from the A University Faculty of Nursing, B University Faculty of Education, and C University Faculty of Education before and after they participated in the fieldwork.

[Results] Analysis of the pre- and post-fieldwork data revealed that the students' level of understanding of the support for people (children) with disability increased in eight out of the nine items evaluated. The participants' level of understanding of four items, namely, building a good relationship with people (children) with disability, identifying

their health-related needs,
providing them support to promote self-decisions, and empowering them,-markedly improved.
[Conclusions] This study reveals that the students who participated in the fieldwork understood
people (children) with disability as well as their families and the importance of various specialist supports according to the life cycle of people (children) with disability. Additionally, through the cooperative learning by different university students in the fieldwork, the students understood the need of cross-disciplinary study and the significance of interprofessional collaboration.

キーワード：ダウン症候群、ライフサイクル、発達・生活課題、学生、フィールドワーク

Keywords：Down syndrome, life cycle, developmental and life challenge, student, fieldwork

Ⅰ．はじめに

近年、日本における出生数は減少傾向が続き、2018年には100万人を割っている。また、晩婚化が進み、初めての妊娠・出産が30歳以上となる割合が増加している[1)]。高齢初産が増加している一方で、ダウン症候群がある出生児の数は１万人当たり22人と横ばい状態であることが報告されており[2)]、出生前診断の拡大と関連している可能性がある。実際、出生前診断の技術の向上により、ダウン症候群などの遺伝性疾患の一部が胎児期に発見された結果、命の選定が行われていることが少なくない[3)]。周産期やその後の乳幼児期以降の成長、発達期における医療技術の向上とともに、福祉､教育分野との連携が徐々に整備が進みつつあるが、様々な課題が散見されている[4)]。さらに、ダウン症候群がある人々の平均寿命が60歳を超え、成人期の支援の必要性が高まってきている[5)]。ダウン症候群などの障害がある子どもが誕生する可能性がある家族は、家族単位で妊娠期から乳幼児期、学童期、成人期へのライフサイクルを通じて、様々な合併症や医療、福祉、教育分野の継続的な支援を受けながら生活する必要がある[6)]。先駆的な取り組みの支援に、ダウン症候群総合支援外来を開催し、家族間交流の必要性を紹介した報告がされているが[7)]、まだまだこの様な取り組みは希少である。また、成人期の就労支援では、英国の多様な働き方や支援の取り組みを紹介し、日本の支援の課題が提示されている[8)]。ライフサイクルに応じた支援の必要性は、ダウン症候群のみならず、他の障害がある人々にも潜在的なニーズがあると考える。

上記の背景において、ダウン症候群をはじめとする知的障害･自閉症スペクトラム障害等がある人(児)(以下、本報告では「障害者（児）」と記す）やその家族を支援する専門職（将来携わる可能性がある医療・福祉・教育学部等の学生を含む）は、すべてのライフサイクルにおける疾病や合併症、生活上の課題の理解を促進するとともに、共生社会の実現に向けて協働の在り方を検討し続ける必要性がある。しかし、背景が異なる様々な専門職、生活経験が乏しい学生の増加により、大学内の講義や演習、実習を中心とした教育だけでは、障害者（児）や家族の生活や発達段階を考慮した課題を学生が認識することは容易でないと考えられる。

現在の学生の障害理解、教育環境に関する先行研究によれば、障害に関する学習は、小学校や中学校の段階で行われることが多く、自己認識の発達として重要である青年期の段階で行われることは少ない[9)]。加えて、社会に出る前、職業等の自己の生き方の具体的選択の段階である大学の段階において障害理解の学習を行う意義は極めて大きいということが指摘されている[10)]。さらに、知的障害や発達障害に対する理解を深めるための授業を行い、その前後において、大学生の障害や障害者に対するイメージや意識がどのように変化するのかを考察した研究の結果、１回の講義のみでは、学生の障害や障害者に対するイメージや意識に変化が生じなかったことから、１回の講義ではなく、回数を重ねる必要性があることが明らかになっている[11)]。以上の通り、大学生を対象とした障害に対するイメージ調査や、障害理解の程度を明らかにする先行研究はこれまでにも多くあるが、大学生への障害理解教育の実践やそれらの内容と効果について検討した先

行研究は少ない[12)]。

医療、教育学部において専門職を養成する大学教員は、大学生が障害理解教育の実践を継続できる機会を設けるともに、効果的な実践教育を検討し続けることが求められている。実践教育のひとつとして、障害者（児）および家族から得られる学び、すなわち多様な価値観をもつ人（児）との関わりが不十分な状況では、障害者（児）のライフサイクルを俯瞰し、各年代期の個々の発達・生活上の課題について共通認識を得ることが困難となり、適切な支援が行えないことが想定される。障害者（児）と協働し将来支援する専門職がともにフィールドに出て、様々なライフサイクルにおける障害者（児）および家族と目的をもって関わる経験を重ねることで、理解が深まり適切な支援につなげることができると考えられる。そこで、令和２年度大学等地域貢献促進事業に応募し、A県における障害者（児）および家族のライフサイクルに沿った各年代期の発達・生活上の課題の抽出し、協働の在り方を検討するための学生フィールドワークを計画した。

本報告の目的は、フィールドワークに参加した学生の障害者（児）および家族への理解が、参加前後でどのように変化したかを捉え、今後の障害理解教育の在り方を検討することとする。

Ⅱ．方法

１．対象者

Ｂ大学看護学部、Ｃ大学教育学部、Ｄ大学教育学部に在籍し、フィールドワークに参加した大学生７名を対象とした。

２．用語の定義

本報告におけるフィールドワークの研究課題を『ダウン症候群を中心とした障害がある（知的障害・自閉症スペクトラム障害等）人（児）および家族のライフサイクルに沿った健康寿命の延伸、QOLの向上を目指して　―学生と対象者のインタラクティブな場を通して各年代期の課題の抽出および協働の在り方の検討―』とし、A県内の様々な施設にて実施した。フィールドワークの内容は、障害者（児）とその家族との相互交流及び家族と関係職種からの聞き取り調査やアンケート調査である（詳細は**表１**参照）。

表１　調査時期とフィールドワークの参加企画及び実施内容

実施日	参加企画及び内容
2020年7月6日	令和2年度大学等地域貢献促進事業公募開始
7月中旬	本学及び他大学の学生参加意思の確認。確認後、研究計画書の作成
7月17日	令和2年度大学等地域貢献促進事業に応募
8月下旬	フィールドワークの企画案・研究計画書作成、学内倫理審査書類作成
9月14日	令和2年度大学等地域貢献促進事業助成金内定
10月11日	第1回質問紙調査（フィールドワーク参加前）
10月11日	小児科医師による出生前診断等ダウン症候群などの疾病に関する講演とインタビューを実施
10月24日 11月8日	ダウン症候群がある乳幼児（両日とも15組程度の参加）の早期療育、保護者同士の相互理解と情報交換を行う有志の場に参加し、わらべ歌や赤ちゃん体操等の企画を実施するとともに家族（母親）や支援者である医師と理学療法士にインタビューを実施
10月27、28日	児童発達支援センターでの療育（主に年長クラス10名）を見学し、絵本の読み聞かせの企画を実施するとともに保育士にインタビューを実施
10月27日	放課後等デイサービス（小学部）を見学し、ダンスおよび買い物ごっこ企画を実施するとともに保育士にインタビューを実施
10月29、30日	特別支援学校（小学部1,2年クラス）の授業を見学し、指導主事にインタビューを実施
10月31日	就労継続支援B型作業所を訪問し、一般就労形態に近い作業内容を見学し、法人役員より、「中間的就労」「自治活動」など多様な支援の在り方について講演を聴講した
11月4、5日	生活介護事業所及び就労継続支援B型作業所を訪問し、ボッチャや紙コップタワー、ショートフィルム鑑賞会等の企画を実施するとともに、精神保健福祉士等の職員へのインタビューを実施
2021年3月1日	フィールドワーク報告会
3月31日	第2回質問紙調査（フィールドワーク参加後）

※COVID-19が流行する禍中であったため、３大学の学生が主体的に協働して活動できるように、研究計画書の作成段階から感染リスクを最小限にするためにZoom® を使用した非対面による全体会議を継続的に行った。さらに、各大学と各フィールドワーク先の感染対策を網羅した内容を確認・検討し、教員および学生が密に連絡を取りながら万全の準備を行い実施した。

３．調査項目

フィールドワーク参加前後に質問紙調査を実施した。

フィールドワークの参加前後に障害者（児）への関心、障害者（児）の気持ちの理解や良好なコミュニケーションができるか、障害者（児）の強みや健康課題、必要な支援について理解しているかといった９項目（詳細は**表２**に記載）について５件法（１．とてもある（できる、ある）２．どちらかというとある（まあできる、ある）３．どちらでもない　４．どちらかというとない（あまりできない、ない）５．ほとんどない（できない、ない））で尋ね、全体の傾向を掴むために平均値を算出した。

自由記述の内容については、フィールドワークの参加前に志望動機、知りたいこと（学びたいこと）、障害（ダウン症候群以外を含む）がある方への関心を持つ理由の３項目に関して尋ねた。フィールドワーク参加後には、学んだこと、今回の学びを今後どう生かすか、障害（ダウン症候群以外を含む）がある方への関心を持つ理由の３項目に関して尋ねた。

４．調査時期とフィールドワークの参加企画及び実施内容

調査時期とフィールドワークの参加企画及び実施内容を**表１**に記載した。フィールドワークは、ダウン症候群がある障害者（児）が必ず１名以上参加できるように企画した。また、障害が同一であっても障害者（児）が抱える発達・生活上の課題が異なり個別性があることや、ライフサイクルを見通し、各時期がつながり連続していることを対象者（参加学生）が理解できるように、各企画は研究者の指導のもと対象者が作成し、障害者（児）の発達年齢に応じた内容で実施した。さらに、対象者が把握した発達課題から障害者（児）の家族の生活課題を抽出できるように、参加企画終了後に振り返りを行う会議を実施した。

５．倫理的配慮

本学倫理委員会（受付NO. 32-14D）の承認を得た。１回目と２回目の質問紙の回答内容を連結させるために、調査対象の学生には匿名性に配慮し本人のみが分かる同一の識別記号を両方の質問紙に記入することを求めた。また、文書にて調査への参加と調査結果の論文等での公表に同意を得た。

Ⅲ．調査結果

対象者７名全員の回答が得られた。

１．フィールドワーク参加前後における選択式質問の回答の変化（表２）

回答結果の数値が低いほど、障害者（児）とのコミュニケーションが円滑にできる、あるいは障害者（児）の支援に必要な上述の項目を理解していることを表す。

表２　フィールドワーク参加前後における質問紙調査結果（選択式）

	参加前後の学生の値 / 項目	参加前 A	B	C	D	E	F	G	平均	参加後 A	B	C	D	E	F	G	平均
1	障害（ダウン症候群以外を含む）がある方への関心 1：とてもある～5：ほとんどない	2	1	2	2	2	2	1	1.7	1	1	2	3	2	2	1	1.7
2	障害（ダウン症候群以外を含む）がある方の言葉や表情・行動から、その背景にある気持ちの理解 1：できる（ある）～5：できない（ない）	3	4	3	3	3	4	2	3.1	2	2	3	3	3	1	3	2.4
3	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方との適切なコミュニケーション（ノンバーバルを含む） 1：できる（ある）～5：できない（ない）	3	2	4	3	3	4	3	3.1	1	2	3	3	3	4	－	2.7
4	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方との良好な関係性の築きかた 1：できる（ある）～5：できない（ない）	3	2	3	3	3	4	4	3.1	2	2	2	－	3	2	2	2.2
5	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方のもつ強みの理解 1：できる（ある）～5：できない（ない）	3	1	2	2	2	2	2	2.0	1	2	2	2	1	2	2	1.7
6	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方の健康課題（発達上および生活上）のニーズの抽出 1：できる（ある）～5：できない（ない	3	2	3	2	2	3	4	2.7	1	2	1	3	1	1	2	1.6
7	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方に必要なフォーマル・インフォーマルサポートの理解 1：できる（ある）～5：できない（ない）	4	2	－	3	3	4	4	3.3	2	2	2	－	2	2	5	2.5
8	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方の自己決定およびエンパワメントを促進する支援の理解 1：できる（ある）～5：できない（ない）	3	2	4	3	2	4	4	3.1	2	3	2	2	2	2	2	2.1
9	障害（ダウン症候群以外を含む）のある方（および家族）のQOLを向上するための支援の理解 1：できる（ある）～5：できない（ない）	3	2	3	2	2	4	4	2.9	1	2	3	2	2	2	2	2.0
	9項目の平均	3.0	2.0	3.0	2.6	2.4	3.4	3.1	2.8	1.4	2.0	2.2	2.6	2.1	2.0	2.4	2.1

＊「－」：無回答、平均点算出時には分母から除外した

表２を基に、フィールドワーク参加前後の調査結果（全体平均値）を比較すると、９項目中８項目で障害者（児）支援に関する理解度が高くなっていた。とりわけ､障害者(児)との良好な関係の築き方､障害者(児)の健康課題のニーズの抽出、障害者（児）の自己決定およびエンパワメントを促進する支援、QOLを向上するための支援の理解の４項目の理解度は大きく上昇していた。

２．フィールドワーク参加前に行った質問紙調査の自由記述（表３）

回答内容は**表３**の通りであるが、ここで回答の要約を示したい。志望動機に関して、本事業に参加した学生の所属学部が、看護学部と教育学部に分かれていたことから、それぞれの学生の専攻分野や将来の職業に関連した内容や役立つ内容を学びたいという動機が見られた。また、本人および家族の話を聞きたい、障害者（児）のライフサイクルごとの発達・生活上の課題や支援の在り方を知りたいという記述もうかがえた。次に、事業への参加を通じて知りたいこと（学びたいこと）に関する質問に対しては、これまでの大学での学修や書籍での学びでは分からなかった点の理解を深めたいという記述のほか、支援の現場における実態を知りたいといった回答があった。障害がある方への関心については、障害や特別支援教育を学んでいるからという理由のほか、自身と他者とのかかわりを構築するため、あるいはユニバーサルな社会や環境の構築のための支援を将来行いたいからといった理由も見られた。

３．フィールドワーク参加後に行った質問紙調査の自由記述（表４）

学生がフィールドワークに参加から得た学びを、以下の４点に集約する。

第１に、各施設を訪問し障害者（児）と交流する経験を積んだことで､｢障害｣とは何かという疑問に対し、大学の講義や書物を用いた座学のみでは理解できなかった答えを見つけたという回答が複数見られた。第２に、７名中４名が障害者（児）のライフサイクルに応じた支援の在り方について学ぶことができたと回答している。第３に、障害者（児）の家族から話を聞くことで、家族が抱える心理的葛藤や障害の受容過程の経過を理解するとともに、障害者やその家族が悩みや不安を打ち明ける場を設ける必要性を感じたという回答も見られた。第４に、「他大学の学生と関わり、異なる考え方を学び、視野を広げることができた」という意見があったことは興味深い。

次に、今回の学びを今後どのように生かすかという質問に対し、教員あるいは看護師・保健師として就職した際に、障害者（児）やその家族との円滑なコミュニケーションのために今回習得した知識を生かしたいという意見のほか、様々な施設を訪問した経験を基に多職種と連携した支援を行っていきたいとの意見が述べられた。

最後に、障害者（児）への関心を持つ理由を聞く質問の回答を分析したい。なお、フィールドワーク参加前の調査においても同じ質問を行っていることから、学生の関心がフィールドワーク参加前後でどのように変化したのかについても取り上げたい。第2回調査で回答した５名中３名は、交流を通じてダウン症候群がある人（児）の特徴や彼ら・彼女らへの接し方の理解が深まった旨を記述している。また、今までダウン症の方と関わったことがなく、ダウン症に関する知識をつけたいとフィールドワーク参加前に回答した学生（**表３**）は､フィールドワーク参加後（**表４**）では「コンソーシアムで様々なダウン症候群の方々と関わることで、障害を持つ方に対するイメージが変化し、ダウン症候群以外の障害を持つ方に対しても興味を持った」と回答している。

表３　学生のフィールドワーク参加前における質問紙調査結果（自由記述）

	志望動機	知りたいこと	障害（ダウン症候群以外を含む）がある方への関心
A	大学で特別支援教育について、学んでおり、自身にとって良い経験になると考えたため。 ゼミの先生に誘われてやってみようと思ったため。	支援のノウハウ 様々な知識 特別支援教育の現場について	特別支援教育を学んで興味が沸いてきているから
B	障害について幅広く学習する中で、ADHDや自閉症については大学において学びを深めてきました。一方で、ダウン症候群について課題や現状を集中して学習する機会はこれまでなかったため自身の知識・学びを深めたいと思い参加しました。	急激退行については精神的影響によるものと考えられている程度で、原因が解明されていません。その中で、どういった支援が現場では求められているのか、また今はどういった支援をされているのかを学びたい。また、他の障害と比較したときに、どのような違いがあるかを考えていきたいです。	全ての人が同じようにできるわけではないことを、しるきっかけになったことが、大学に入って障害の存在を知ったことであり、自分と他の人の違いに興味を持ったから。
C	元々特別支援教育に興味があり、このコンソーシアムで学び、将来に活用しようと思ったから。	ダウン症候群の子どもの特徴 ダウン症候群の方、その家族の関わり方（将来、教諭になった時）	軽度発達障害の家族がいる。うまく関われない時もあるため、どうすれば良いかかわりができるか考えたいと思っているか
D	以前、ダウン症の子どもや知能の遅れがある子どもと関った時に、何の知識もなく上手く関わることができなかったので、発達の知識を身につけたいと思いました。	就学期以降になると医療機関の受診回数が減っていくと書いていたが、その対処法はあるのか 発達に遅れがある子どもの親が特別支援学校に行かせない場合はどうすれば良いか。	
E	将来は看護師、または特に乳児期～学童期の子どもたちに興味があり、その子たちに関わる仕事に就きたいと考えていて、実習だけでは学べない部分であるダウン症についての知識を身につけ、関りの中で感じたこと、実際に本人や家族の方などから話を聞き、今後働く上でのその方々に寄り添えるように看護・支援したいと思い、参加しました。	各発達段階における問題とライフサイクルに応じた支援方法について学びたい。また、各発達段階の生活上の特徴・強みについても知りたい。	今までダウン症を持った方と関わったことがなく興味を持ったため。また、ダウン症についての知識をつけたいと思ったため。
F	普段障害がある人と関る機会は少なく、将来看護師や保健師として、働く際に、障害がある人のケアや支援をしていくさいにこの学びを活かしたいと思ったから。	障害がある人のライフサイクル別の課題や支援のあり方について。	
G	将来、看護師、保健師として病院や地域で働くことが夢であり、ダウン症の方と関わる場面が出てくると考えられる。そのため、乳児期・幼児期・学童期・成人期にはダウン症の方ではどのような生活・発達課題があるのか知ることで、それぞれの時期に必要な支援について考えることができ、実際に専門者として支援を行っていく際に活かせるため。	ダウン症候群の子どもの特徴は、本当に本に示されている通りであるのか、実際にどんな特徴があるのか一人ひとりの多様性について知りたい。ダウン症の方はそれぞれの年齢に応じてどのような支援のニーズがあり、どのような関り方をすると良い相互交流が行えるのか学びたい。お母さんや家族にはどのような不安があり、どのような支援を求めているのかを知り、看護職として障害を持つ方や家族への情報提供や関わり方など支援をする際に重点を置くところを知りたい。	障害というのは誰にでも起こり得るものであり、障害があったとしても健常者と同じような生活ができるように一人ひとりの障害に対する悪いイメージをなくすことやハンデの部分を補うことで、誰でも暮らしやすい環境のための支援を将来行いたいと考えているため。

表4 学生のフィールドワーク参加後における質問紙調査結果（自由記述）

	学んだこと	今後どう生かすか	障害(ダウン症候群以外を含む)がある方への関心
A	大学では、学童期にあたる施設の訪問をする機会はあったが、その他の発達段階にある施設を訪問する機会はなかったため、貴重な体験をすることができた。他大学の学生と関わり、異なる考え方を学び、視野を広げることができた。自分が学童期・成人期において障害を持つ方の支援に関わりたいと考えいていることに気づくことができた。和歌山県内のどこに各施設があり、何をしているのか、その一例を知ることができた。	障害支援を行う福祉事業について、地域包括支援センターや相談支援事業所など他にもいろんな事業があるのを残りの大学生活で調べたい。特に、和歌山県については、具体的な場所や事業所までを確認し、周りの人に紹介できるようにしたい。	障害を持つことで社会での活動が制限される現状は変える必要がある。また、自分にとって特別支援の学習は苦痛を感じることがなく、むしろ他者と自己の評価のズレによる自己肯定感の低さに気づかせてくれた安心を感じるものだから。
B	ダウン症に関する方々やそれを取り巻く環境の現状 ダウン症に関する知識 オンライン上で資料の完成など課題を行っていくことの難しさ	特別支援学校の教員を目指しているので、現場で活かしていきたい。 オンライン上で課題等を進めるノウハウを活かしていきたい。 ダウン症やそれ以外の障害等に関する知識の習得等に活かしていきたい。	
C	支援している人の思いを知ることができた。それぞれのライフステージの課題を考えることができた。	自分が知らないことをたくさん学べた。 もっと理解を深め寄り添う支援を行えるよう活かしていきたい。	
D	障害を持つ方について、ダウン症のことについて学びました。私は今までダウン症の方と関わったことがありませんでしたが、今回のコンソーシアムの研究やフィールドワークで多くのことを知ることができました。	将来、子どもと関わる仕事に就きたいので、今回の学びはとても貴重なものでした。子どもを持つ親御さんの悩みや心配事、不安、喜びなど多くのお話しを聞き、子どもの成長をともに見守っていけるような保育者になりたいです。また、子どもの間に信頼関係を築いたり、安心できるような雰囲気を作ることや、子ども一人ひとりにしっかりと向き合うことが大切だと感じました。	障害を持つ方への配慮やサポートはとても大切だと思いますが、接し方は変わらないからです。
E	それぞれの発達段階に応じた身体的特徴、仕事の様子など生涯を通した生活を学ぶことができた。また、それだけでなくダウン症候群を抱える家族の心理的葛藤、受容過程などについても学ぶことができた。さらに、実際にダウン症候群をもつ対象者と家族と関り、ライフサイクルごとに必要な支援方法についても学ぶことができた。	今後、看護師・保健師になったときにダウン症候群をもつ対象者と家族に関わる際には、今回の学びを活かし、対象者と家族にとって必要な情報提供や多職種との連携を行い、よりよい支援につなげられるよう架け橋になりたいと思う。	今回和歌山コンソーシアムで様々なダウン症候群の方々と関わることで、障害を持つ方に対するイメージが変化し、ダウン症候群以外の障害を持つ方に対しても興味を持ったため。
F	ダウン症の特徴や各ライフサイクルにおける課題について学ぶことができた。また、ダウン症児を持つ家族がどのような思いで子育てをしているかなど、ダウン症児や家族のことを全体的に捉えることができた。	継続した支援が必要となるため、今回の研究で抽出した課題を次は具体的な支援方法に繋げていく必要がある。	実際に交流を通じてダウン症の特徴や接し方などを知ることができたから。
G	ダウン症では、言語表現が苦手であること、語彙数が少ないなど障害の特徴を理解した上で、コミュニケーションをとることも大切ですが、障害の枠にとらわれず、一人の人間として自然体で接することで、障害を持つ方との良好な関係づくりにつながると学びました。ダウン症だからといって健常児ができることができないとは限らず、時間をかけながらも、健常児と同じように歩行や会話など様々なことができるようになることを学んだ。また、障害を理解してくれ、暖かく受け入れてくれる場所があることで、障害を持つ方もその家族も前向きに明るく生活しるう姿をみることができました。そのため、地域で生活する少しでも多くの人にその障害について知ってもらうことにより、そのような居場所をつくることや、同じ立場にいる方や悩みを抱えた方が集まる場の提供により障害者とその家族が悩みや不安を打ち明けることのできることの大切さを学びました。	看護職として障害者と接する際に、その障害について知識を深めることで、コミュニケーション方法を工夫し、スムーズなコミュニケーションを図るなど、障害の特徴を理解した上での思いやりのある関わりを大切にしていきたいです。また、障害の特徴だけでなく、障害を1つの個性と捉えて、一人の人間として自然体で関わることで、その人自身の性格や価値観などについても理解を深めることで信頼関係を築きながらサポートしたいです。障害の枠をつくらず健常児と同じように本人が挑戦したいことはなんでも挑戦できるような場を提供できるように関わって行きたいです。また、看護職として働いていく中で、障害や病気への理解を深め、患者や障害者の思いや悩みなどを傾聴・共感し暖かい態度で接することで安心して生活できることができるように関わっていくことを大切にしたいです。また、専門職による相談を受けることができる場や同じ病気や障害をもつ方との交流の場などの社会資源の情報を提供することなどにより、その人が前向きに生活を送れることができるように居場所作りも行っていきたいです。	事前学習でダウン症について学び、実際に交流することで、さらにダウン症の特徴や課題などへの理解や関心が深まったため。

Ⅳ．考察

フィールドワークに参加した学生は様々な障害者（児）やその支援者および家族と関わり障害者（児）の発達・生活上の課題を抽出する過程を通じて、障害者（児）への関心や理解はどのように変化したのだろうか。参加前後に実施された９項目の選択式質問紙調査では、障害者（児）への関心度の数値にフィールドワークの参加前後で変化は見られなかったが、その理由は参加学生が参加前の時点で既に高い関心を有していたからと考えられる。他方で、自由記述の質問回答からは、障害があるから○○（たとえば歩行や会話）ができないとあきらめるのではなく訓練を続けることの重要性や、「健常者」・「障害者」という障害の有無によるカテゴライズに基づいて他者と接するのではなく一人の人間として接することの大切さを学生が学んだことがうかがえる。支援する側・される側という相互関係ではなく、障害の有無にとらわれない対等な関係での相互交流を通じて、学生が自分自身を見つめ直し成長する機会にもなったのではなかろうか。先行研究においても、障害について知識的な面からの理解、実際に関わる経験を通しての体験的な理解が正しい障害理解を促すために必要であることが示唆されており[9)]、本報告においてもフィールドワークに参加した学生が障害者（児）の発達・生活上の課題に応じた企画をインタラクティブな場で実践した結果、障害者（児）が持つ感情やコミュニケーション等の理解が深まったと考えられる。

また、フィールドワーク参加前の調査では自身の専攻分野の学びを深めたいと回答していた学生が、フィールドワークにおいて他大学の学生と関わり、異なる考え方を学び、視野を広げることができた旨を参加後の調査で回答している。同じ市内にキャンパスが所在しているものの接する機会が少ない３大学の学生の交流が図れたこと、また、専門家の講話を通じて、教育学を専攻する学生は医学に関する知識を、看護学を専攻する学生は教育学に関する知識を得るという分野横断型の学修を行えたことから、フィールドワークへの参加意義は大きかったと考える。

最後に、フィールドワークの企画運営に携わり参加学生の支援を行った指導教員の立場から、複数の大学の学生による共同研究および学生と地域住民との協働がもたらす障害理解教育の成果と今後の発展に向けた課題について以下３点述べたい。

第１に企画が約１年間と長期にわたるため、３大学の講義や実習に配慮した上で、フィールドワーク実施日等の計画を教員が中心に立案した一方で、各企画内容については、リーダーが中心となり学生同士で決定した。また、教員は企画が障害者（児）の各ライフサイクルの発達・生活上の課題に合った内容になっているか、感染防止対策は適切に実施されているかどうかを確認することで、学生への支援を行った。その結果、各フィールドワーク先の職員からは、好意的な意見を聞くことができた。

第２にフィールドワーク先を選定するに当たり、一人の障害者（児）が同じ地域で胎児期から成人期まで時間を過ごすことが容易にイメージできるように各施設が同一市内（概ね10km圏内）に収まるように選定し、障害者総合支援法における同一のサービス支給体制のなかで、発達・生活上の課題が見通すことができるようにした。学生の自己評価では、関心の項目以外での障害理解が深まっているが、実際に交流する日時や回数、ライフサイクルを俯瞰して個別性に応じた障害理解を行う視点の深まりは十分とはいえなかった。よって、看護臨地実習や教育実習等で行われるように、実習記録用紙を用いて企画ごとの学習目標を明確化し、学習内容の省察を実施するといった工夫が必要であろう。

第３に、各学部（看護学部、教育学部）の学生の視点を尊重し、医療・保健分野からの視点や教育分野の意見が出るように促し、学生の一定の相互理解が進んだと考えられる。さらに、各大学の学生同士の学部紹介などの機会があると、それぞれの専門的な視点が深められたと考えられる。

Ⅴ．結論

フィールドワークへの参加前後に行った調査から、フィールドワークに参加した学生が、障害者（児）及び家族の理解や様々な専門職者の支援がライフサイクルに沿って展開されている意義を理解できたことが明らかになった。また、大学や年齢の壁を越えて同じ地域で学ぶ学生や地域で生活している人々の交流を深めることで、地域でのつながりが生まれたと考えられる。今回の調査結果は、学生が自身の専攻分野にとどまらず、看護、福祉、教育といった様々な関連分野を横断する形で障害児（者）支援について学んでいくことの必要性や、学外に出向き当事者から学ぶフィールドワークの重要性を示唆するものであった。さらに、卒業後に看護師や教員などの専門職に就いた際に、障害児（者）支援のための多職種連携を行っていくことの大切さを学んだ学生も少なくない。大学での学びを横断的に捉え、地域や職業といった実践でいかに活用すべきかを学生が考える機会を、今後も拡充していく必

要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。本研究は、令和２年度大学等地域貢献促進事業（学生共同プロジェクト研究）の助成を受けて実施した成果の一部です。

引用文献

１）厚生統計協会編集．厚生の指標　増刊国民衛生の動向 2020/2021　東京：2019；57-59.
２）Sasaki A ,Sago H. Equipoise of recent estimated Down syndrome live births in Japan. American Journal of Medical Genetics - Part A 2019; 179: 1815-1819.
３）竹内千仙．成人期を見据えたダウン症候群のある児への関わり．小児保健研究　2020；79：2-9.
４）同上
５）神原容子，竹内千仙，川目裕，他．成人期ダウン症候群において必要とされる情報提供と家族支援のあり方．日本遺伝カウンセリング学会誌　2019；40：101-108.
６）同上
７）大橋博文．ダウン症児の育ちと生活5乳幼児期の育ち．チャイルドヘルス　2020；23：25-29.
８）倉石佳織，北村澄香，北村千章，他．英国Down's Syndrome Associationでの調査報告―"WorkFit"の就労支援に焦点をあてて―．日本遺伝看護学会誌 2020；19：72-78.
９）庄司和史．大学生の障害理解学習について―「特別支援教育の理論」履修前アンケート調査より―．信州大学人文社会科学研究 2013；7：159－173.
10）同上
11）村上理絵，若松昭彦，氏間和仁，他．知的障害および発達障害に対する大学生のイメージおよび意識の変化―教育学部生を対象とした授業のアンケート分析から―．広島大　学大学院教育学研究科紀要 2018；67：91－97.
12）高橋咲良，中野裕美子，水内豊和．障害理解をねらいとした教養科目講義を受講した大学生の知的障害者に対する意識変容．富山発達福祉学年報 2020；11：11-17